

シャガールの絵画が、記憶というもののさまざまな機構のうえに建てられていることは、既に何度も強調されてきた。彼自身、こう主張してはいなかったか、「画家はひとりひとりが何処かに生を受けた者であり、後になって、新たな環境からの影響に応答することとなっても、生まれた土地のなんらかの本質、何らかの香りと言うものは、彼の仕事のなかに生き続ける」と<sup>1)</sup>。扱われたさまざまな主題なり、モチーフなり形象なりをくまなく見回してみれば、そのことは明かに確認される。

初期のキャンヴァスにおいてすでに、シャガールは日常生活情景やそれに寄り添う風景をかきつけたが、それらはさながら彼の絵画実践を錬成するに必要な視覚記号というにふさわしい。しかしながら、例えば《かごを持つ女》(1906-07)、《小さなサロン》(1908)などが、《工場》(1908)や《並木》(1908)、《祈禱台》(1909)さらにはマイヤーによってリスト・アップされたマニアやアニウタの姉妹の初期の肖像と同様に、現実の観察を基礎としたものであるのに対し、1910年以降のパリ滞在、さらに1928年の決定的な故国との断絶は、シャガールの全作品を構成することとなる、ひとつの「記憶の劇作術」を出現させる。

郷愁と愛惜とが、そうした記憶の劇作術の紋章となる人々の姿を描く。しがな魚屋の傭人だった父ザハールは、その屈辱と沈黙の顔が、ハシディズムの伝統に属する敬虔なラビか、正教の伝統にある聖なる老修道士たち、あの、長い伝統に培われた、親しみ深い老人たちの原初的な典型を思わせる。母フェイガ・イダは、生命力が生き生きと横溢して輝く、一家の守護女神。弟ダヴィッドと、妹アニウタ(アンナ)、ツイナ、イザ、マニア、ロザ、マルツシア、そしてラヒエル……最後に、絵画のモチーフのうちにその永遠の姿をとどめ、絵画を育む原母胎となった、ヴィテブスクの町は、亡命によって失われ、絵画によって再び見いだされた生誕の地を、執拗なまでに具現する。シャガールの図像学的レパートリーのなかには、彼の出自である、ロシア系

ユダヤ文化の源泉を認めることのできる例は事欠かない。作品に繰り返し現れるヴァイオリン弾きは、農村のユダヤ共同体の社会組織にその起源を持つ。それは、伝統的に婚礼の供をする「クレズメル」(ヘブライ起源のイーディッシュ語で楽士の意)なのである。

とはいえ、想像の領域<sup>イマジネール</sup>では、画家はたいていの場合、キャンヴァスの中の空間でもっとも特権的な位置を割り当てられ、それ故、ある普遍的な価値を授けられる。爾來、ヴァイオリン弾きの姿は、神話的な威厳を帯びるに至る。彼は、集合的想像界の偉大なる創建者の似姿のひとつである。魂の渡し主、ヘルメース・ブシコポンプの変奏の系譜に連なるのだが、その一例で、ゲルマンの伝説に遡り、モーツァルトのオペラにも取られたフルート吹きについては、シャガールはその舞台装飾と衣装を1966年、ニューヨークで手掛けている。

次に、形態上の分析を施して、図像学的分析の補強に充てよう。アイコンの芸術がシャガールを魅了したことは、いままでも強調されてきた。1910年、パリに出る以前に、シャガールはペテルブルグのバクストのアトリエで、ロシア・ネオ・プリミティヴィスムのパイオニアである、ミハエル・ラリオーフやナタリヤ・ゴンチャローヴァと接触することもできたろうし、今日ロシア美術館となっている、アレクサンドル三世美術館を訪れ、アイコンの収集を観ている。おそらく彼はそこで、もっとも古く、有名なロシアのアイコンである、ヤロスラフの大バナギアに見とれたであろう。「しるしの処女」と称するタイプのこのアイコンは、イザヤ書の七章十四節に典拠をもつもので、祈禱する姿の聖母を描いている。源となったこのアイコンと、アムステルダム市立美術館に収蔵されている1913年のタブローとに、形態上の類縁があるのは明かであるが、それはシャガールの表現そのものに認められるものである。例えば、人物の姿が著しく

引き延ばされ、さらにはそれが、頭部と体のそのほかの部分との不釣合な大きさによって強調される。また、正面を向いた姿への好みがあり、そのせいで、観者は絵画に対して直接に観想の関係を持つこととなる。さらに、空間が細分化されており、そのため、中央の人物なり場面なりの周囲に、映像が同時的に組織される。シャガールが、二次元空間としてのタブローという構想を引き出したのは、アイコンおよびルポークと呼ばれる、ロシアの民衆版画からだったのである。アイコンやルポークにおけるのと同様に、色彩は空間を総合化する。シャガールがしばしば用いる赤い地は、ノヴゴロド派のアイコンに由来するのではあるまいか。

シャガールの作品において、ユダヤ文化とロシア文化とは親密な共棲を営むが、それがおそらくもつとも完璧な表現をみせるのは、芸術家自身が絵画や創造というものに関して抱いている構想の内においてであろう。その構想は、伝記に生きられた体験の内にも汲まれる。そこには、特異な一文でもって、芸術家の生誕にまつわる物語が展開される。「まず目に飛び込んで来たのは、ひとつの水桶だった……」。このようにシャガールは自分ののはじめての視覚を想起するのだ。それからすこし先で、自分が難産であったことを思いだしながら、シャガールはこう付け加える、「私は生きようとしなかった。生きようとしなひひとつの白い泡を想像していただきたい。まるでシャガールの絵を腹いっぱいいつめこんだような、一つの泡」<sup>2)</sup>。

というわけで、この自伝の語りには、いっしょに〈視〉の領野に位置づけられ、あの、エルネスト・クリストとオットー・クルツによって研究された、あまたの画家たちの伝記につらなるものとなる。あの、〈前もってさだめられた宿命〉<sup>3)</sup>という主題系が構成されるわけである。つまり、絵画というものがそのまま、シャガールの実存のうちに棲まっているわけだ。シャガールは、ただ画家という召命ひとつによって、絵画と骨がらみ結びつけられているのだが、それはちょうどパンとぶどう酒が聖別されて聖体と化すようなものなのである。画家がその営みとむすぶ関係は、したがってもう抑えようもない聖性を、その特徴として帯びることとなる。

「長く尾を引いた翼をはたはたとざわめかせて」<sup>3)</sup>天使がシャガールの前に現れる様は、《幻影》(cat. no. 67)と題されたタブローに描かれるが、この天界の使者は、画家の能力を超えた、ある意志の手先なのである。絵画の機能とは、したがって、かかる

意志によく仕えることであって、画家とは、すでにヴァザーリも言ったように、「神のスタイリスト」なのである。絵画というもの<sup>4)</sup>の預言的なまでの領域を、慎ましくも、おのが身にひきうけることで、シャガールは、ユダヤのメシア信仰とロシアのメシア信仰との間に和解をもたらす。およそ絵画のイマージュは、したがって、なによりもまず、アイコンの性格を持つ。タブローは我々の目を啓く。それは、見えざるものへと開かれた窓、超越への開口部、あらたなるヤコブの梯子なのである。なぜなら、人間の創造力とは、神の創造力に由来するものなのだから。そして、絵画とは、神による天地創造を、隠喩としてなぞり返すことなのである。

「創造は彼にとってひとつの神秘であった、  
メチエ<sup>5)</sup>職業ではなくて奇跡であったのだ」

と、アンドレイ・ヴォズネセンスキーは書いている。

数語にして、本質的なことは言われている。そして、それが詩人の口から言われたのも、故なきことではない。

なんとすれば、まこと、シャガールの絵は詩のことば<sup>6)</sup>なのだから。それはなにも、隠喩や象徴や寓意のように、言表の範疇に属する手続きを踏むという訳ではない、そうではなくて、シャガールの絵とは、無垢の音楽のごとくに歌う、あの原初の息吹、あの心の呼吸であるからだ。

詩人たちはあやまらず、シャガールもまた彼らの一員であることを観てとった。アポリネールやサンドラールの横に、プーシキンやマヤコフスキー、エセーニン、ヴォズネセンスキーのかたわらで、ユダヤ人シャガール、ロシア人シャガール、画家シャガールが、その声をありとあらゆる生けるものたちの遍き歌声に交えあわせ、その遍き声は、朝な夕な湧き起こって、我らが主を誉めたたえる。

国立マルク・シャガール〈聖書の音楽〉美術館館長  
フランス国立美術館研究官

(訳・稲賀繁美)

註

- 1) The Artist, The Work of the mind, シャガールの講演, 「芸術家, 心の仕事」 1947年, シカゴ大学出版局より刊行。
- 2) 『わが回想』, ベラ・シャガールによるロシア語からの翻訳, アンドレ・サルモン序, ストック書店, パリ, 1989年, 11-12頁。
- 3) 同上, 118頁。

訳者付記。ロシア語、イディッシュ語の表記には加納格氏のご教示を得た。記して謝意を表す。

シャガール展

カタログ

監修 木島俊介

編集 木島俊介 Bunkamura ザ・ミュージアム・プロデューサー  
深谷克典 名古屋市美術館学芸員

テキスト アーラ・バプロブナ・グサロワ  
シルヴィー・フォレストイエ  
木島俊介  
深谷克典

翻訳 新田喜代美  
高橋寿美江  
稲賀繁美  
芝 優子

デザイン 浅井 潔  
制作 アイメックス

発行 東京新聞

Marc Chagall

Catalogue

Direction: Shunsuke Kijima

Rédaction: Shunsuke Kijima Conservateur du Musée des Beaux-Arts du Bunkamura  
Katsunori Fukaya Conservateur de Nagoya City Museum

Texte: Alla Pavlovna Gusarova  
Sylvie Forestier  
Shunsuke Kijima  
Katsunori Fukaya

Traduction: Kiyomi Nitta  
Sumie Takahashi  
Shigemi Inaga  
Yuko Shiba

Réalisation: Kiyoshi Asai et Imex Inc.

Publication: Le Tokyo Shimibun

©1989 Le Tokyo Shimibun  
©ADAGP, Paris and BCF, Tokyo, 1989

*Imprimé au Japon*